

東日本家族応援プロジェクト 2021 in 多賀城 を開催しました！

人間科学研究科教授 村本邦子

いよいよ最終年となった東日本家族応援プロジェクト 2021 in 多賀城を、2021 年 10 月 1~3 日、無事、開催することができました。9 月末までのコロナ禍緊急事態宣言と台風接近で、ギリギリまで心配しましたが、多賀城のみなさんと直接お会いし、楽しいひと時を一緒に過ごせたことは、本当に嬉しいことでした。

初日の夜は交流会で、いつものように食事を分け合っというわけにはいきませんでした。お互いの近況や今後の思いや見通しについて語り合いました。多賀城市立図書館の館長や担当者は新しい方になりましたが、旧知のように暖かく迎えてくれました。旧図書館時代から関わってくれている丸山隆さん（現在は教育委員会生涯学習課）が毎年、応援に来て、バックアップしてくださるのは、大変心強いものです。プロジェクト初年度からプログラムを引き受けてくださっているおおぞら保育園の黒川先生、多賀城民話の会新会長の小林さんも参加してくれました。自己紹介とともに、これまでの振り返り、現地の方々から、プロジェクトは今年で最終回となるとしても、今後も現地の力でできることを続けていきたいとの決意表明があり、本当に報われ励まされる思いがしました。

10 月 2 日（土）午前、多賀城市立図書館で、おおぞら保育園と多賀城民話の会による「歌とお話と伝承遊びを楽しもう」ワークショップが開催されました。予想以上にたくさんの親子が集まってくれました。人数制限、体温測定、手指の消毒をしたうえで、30 分程度で入れ替わりながら、30 名以上が、一緒に楽しいひと時をすごしました。制限人数の関係で、スタッフは時々しか中に入れなかったのですが、元気な子どもたちの姿に明るい未来を見る思いでした。保育園の先生方、民話の会のみなさんの子どもたちをひきつけるプロの力にあらためて感心させられます。

お昼、小林さんが民話に出てきた喜太郎神社や末の松山などを案内してくれました。台風の影響で、前日に予定していたタガの柵ツアーはキャンセルになりましたが、院生たちに多賀城の史跡や津波の痕跡を見せることができました。

午後は漫画トークで、先着 20 人限定とし、オープンスペースに仕切りを作ってじっくりトークを楽しみました。アンケートを見ると、初めての方、毎年来てくださっている方、雑誌等のチャンネルを持つコアなファン層など、さまざまな立場の方がいましたが、いずれの方にも大変喜んで頂けたようです。「今回は最後だとは残念でたまりません。いつもマンガで軽いけど深いおはなしをありがとうございます。お元気で！」「思春期の息子を持つ。自分にとってとてもヒントになるお話を聞くことができました。心に栄養を頂いた感覚です。団先生、村本先生 たくさんのご支援ありがとうございます。」など、今回は続けてきたことの最後の区切りであることを意識したコメントが多く見られました。図書館より記念の花束まで頂き、胸がいっぱいになりました。

今年度は最終年ということで、どこへ行っても、その土地や人々との最初の出会いからこれまでをしみじみ思い起こし、積み上げられてきた時間をひしひしとを感じる経験となりました。眼に見えない暖かく長く続いてきた確かな力を受けとり、分かち持ち、また若い人たちに受け渡していくという営みを信じていることができたプロジェクトでした。これまでお世話になってきたたくさんの皆様に心より感謝いたします。





東日本・家族応援プロジェクト in 多賀城 2021

団士郎

コロナ禍がピークは超したように思えたこの時期に、プロジェクト最終年と位置づけた2021プログラムが、現地で行えたことはなによりだった。残念ながらむつ市プロジェクトは二年連続のリモート開催で最終を迎えていたので余計にそう思った。

多賀城市図書館でのマンガ展はいつものように、みたい人には落ち着いてみて貰える、ひっそりした佇まいで開催されていた。このマンガ展が人集めのイベントではなく、図書館の年中行事のように位置付けていくと良いとあらためて思った。

十年と決めていたので配布文庫版「木陰の物語」はなくなったが、それも新たなステップに感じられた。今後のマンガ展継続がどのような形にしていくのか、いい在り方を模索した

い。

去年は zoom 開催になった漫画トークもライブで行えた。図書館スペースの使い方も回を重ねるごとに洗練されてきて、今年は特に話しやすい雰囲気だった。図書館のイメージが変化してきて、地域住民のサロンになっているような気がした。ほどよい人数の場で、ゆったり集中して聞いて貰えるのは、話者として快適だった。

フィールドワークの震災遺構・荒浜小学校訪問は強い印象を残してくれた。地域の多くの人たちと児童たちが生き延びた避難場所。怖い話も多いが、見るべきものの多い施設だと思う。どうしても大川小学校を訪れた感覚と比較してしまうが、印象の差は、避難の適否、生死の差だろう。生き延びた者達の津波遺構は、いろんなことを考えさせてくれた。

仙台メディアテークでの「みやぎ民話の会」とのシンポジウムは、これまでの様々な企画とはテイストの異なる、充実感のあるものだった。場のもたらした偶然性にも後押しされて、良い最終年の取り組みになった。



「若く美しくなったソクラテス」とみやぎ民話の会をつなぐもの
～2021 多賀城プロジェクト報告～

鵜野祐介

今年（2021 年）10 月 3 日、仙台市のせんだいメディアテークで行われたみやぎ民話の会のメンバー、小野和子さん、島津信子さん、加藤恵子さんとの座談会にリモートで参加した。プロジェクトメンバーとして団先生、村本先生、事務局の平田さん、院生の渡辺さんと若洲さんが参加し、また昨年度のプロジェクトにリモートでご参加いただいた目黒トミ子さん、それから当日たまたま会場に来ておられたという旧知の「若く美しいアーティスト」である瀬尾夏美さん、小森はるかさん、福原悠介さんにも加わっていただき、温かく濃密な談論の場を共有できた。

実は、今年 5 月に発表した拙稿「五十嵐七重の語りを聴く—小野和子の民話採訪と『未来に向けた人類学』—」（うたとかたりの研究会『論叢うたとかたり』第 3 号所収）において、小野さんやみやぎ民話の会の活動について、みやぎ民話の会が昨年 8 月に発行された 4 枚組 DVD「福島県奥会津 五十嵐七重の語りを聞く」や、小野さんが 2019 年に出版された『あいたくて ききたくて 旅にでる』を主なテキストとして探っていた。その中でたどり着いた一つの仮説が、小野さんやみやぎ民話の会に及ぼした林竹二の影響だった。少し長くなるが、拙稿から引用させていただく。

田中正造（1841-1913）は「日本初の公害・足尾鉍毒問題に生涯をかけて取り組んだ栃木の義人」だが、おそらく小野は、プロフィールにも記した林竹二（1906-1985）との出会いを通して、林が長年にわたって取り組んだ田中正造と遭遇したに違いない。宮城教育大学学長を務めた教育学者・林竹二は、『授業・人間について』（国土社 1973）、『田中正造の生涯』（講談社現代新書 1976）、『教育の再生を求めて 湊川でおこったこと』（筑摩書房 1977）、『若く美しくなったソクラテス』（田畑書店 1983）などの著書で知られる。学生時代、教育学を学んでいた筆者も、読者に背筋を伸ばして読むよう促すこれらの著作を通して、林から強い感化を受けた経験を持つが、彼の教育論の根幹に〈対話〉ということ、そして〈きく〉ということがあったという事実で改めて思い至っている。

田中から林へと受け継がれた信念、すなわち「学ぶことは古い自分を打ち捨て、自分自身を変革することである」という教えを、小野は民話を〈きく〉ことの真髄として受けとめ、これを実践していったと言える（鵜野 2021：16）。

『あいたくて～』所収の「小野和子年譜」によれば、1983 年、小野さんは元宮城教育大学学長の林に、同大学の同僚だったご主人の四平さんを通じて知り合う。そして、「林氏の全国小・中学校への授業行脚に感銘を受け、同氏の宮城教育大学最終講義を中心にまとめた

『若く美しくなったソクラテス』（田畑書店）の原稿清書を一部担当した」（同書より引用、なお『若く美しくなった〜』には、林の東北大学教育学部最終講義を中心にまとめたと記されている）。

また、今回の座談会にご参加いただいた加藤さんと島津さんは、共に宮城教育大学のご出身であることから、当時学長を務めていた林の薫陶を受ける機会もあったのではないかと推測された。

こうした経緯の下、今回私が一番聞きたかったのが、実際に小野さんや加藤さんや島津さんが、林竹二から何らかの影響を受けていることを感じておられるのか、そしてそれはみやぎ民話の会の活動とどう関わっているかという点だった。

私の質問に対して、お三方とも驚いておられたが、それでも全くの的外れではなかったようだ。詳細については機会を改めて記すことにしたいが、小野さんの次の言葉が印象に残っている。「私の活動の根底には林先生の言葉があった、林先生によって導かれていたと思います」、「プラトンは『私がここに書いているのはすべて、若く美しくなったソクラテスの言葉だ』と言ったそうですが、民話の採訪の活動も同じで、私が書き留めた言葉はすべて、私自身の言葉ではなく、若く美しくなった語り手の方がたの言葉だと思っています」。

この「若く美しくなった語り手の言葉」とは何を意味するのだろうか。今回の座談会の中で、小野さんは次のようにも話された。「聞くということは、誰にでもできそうですが難しいことなんです」「それは命がけで、自分を壊して相手に向かうことであり、自分との闘いだと思っています」。

「対話術」とも呼ばれるソクラテスの問答法に学んだプラトンは、ソクラテスの言葉を「命がけで、自分を壊して相手に向かって」聞くことを通して、その言葉を「若く美しくなった」形で記録に残そうとした。これと同じ関係性が、民話の語り手と、聞き手である小野さんとの間にも成立していたということなのではないだろうか。

島津さんや加藤さんも、当時は学生紛争が盛んだったため授業をまともに受けられず、林の警咳に接する機会もほとんどなかったが、教師になってから授業映像や写真を通して林の実践に触れ、「教えることは学ぶこと」「学ばないで教えることはできない」という教えを林先生に学んだと話してくださった。

『若く美しくなったソクラテス』の中で、林は次のように述べている。

問いによって相手から引きだした答を、きびしい吟味にかけることによって、「生けることば」が相手にその核心において正しく受けとめられ、その魂に根を下し、新しい生命を付与されて生きつづける、ということが考えられているのです。そのことばは、相手がふさわしい魂であったときには、蒔きつけられた種子としてその魂の中に根づき、芽をふき育ってゆく、というのです」（林 1983：15）。

林の指摘するソクラテスとプラトンの関係性は、民話の語り手と、聞き手でありその記録者である小野さんたちとの間にも成立するものであり、また、林が晩年全国各地を行脚して精力的に行った小学校～高校での「人間について」の授業実践における、児童生徒と林との間にも成立していたものであろう。そしてこれは、人が人と出会い、触れ合う、あらゆる場面において心に留めておくべきことだと思われる。

今回は体調不良のため、宮城に足を運ぶことができず、プロジェクトメンバーの皆さんに多大なご迷惑とご負担をおかけしたことをお詫びいたします。また、座談会の場を提供して下さったせんだいメディアテークの皆様、当日ご参加いただいた全ての皆様に、紙面をお借りして感謝の意を表し、結びとさせていただきます。ありがとうございました。





東日本大震災が遺したものと紡いできた 10 年の絆

臨床心理学領域 M1 渡邊友

初めての東北、初めての多賀城市。18時過ぎに仙台から乗ったJRの車内は緊急事態宣言明けの初日で、座席は埋まりまばらに人が立っているが、関西のざわざわした雰囲気はなく、静かだった。多賀城駅のすぐ近くにある図書館の3階レストランで行われている支援者交流会に向かう。席に到着し、黒川先生、丸山さん、多賀城民話の会の代表の小林さんにご挨拶をする。これまで一緒にこのプロジェクトを作ってきた皆様と、ようやくHP原稿を通してではなく、実際に会えた喜びを感じつつ、和やかな雰囲気の中交わされる言葉に耳を傾ける。

翌朝、多賀城市立図書館にてワークショップを実施した。多賀城民話の会の皆様は、民話の語り聞かせ、「いわしのひらき」や「かっぱ」の歌を歌いながらする手遊びを、おおぞら保育園の皆様は、絵本「はらぺこあおむし」の歌やぬいぐるみを使った読み聞かせ、ペープサートを使った「どんないろがすき」、「あんたがたどこさ」のお手玉遊びなどを紹介してくれて、学齢期前後の子供とお母さん、お父さんと一緒に楽しい時間を過ごした。図書館1階の子供用の読み聞かせスペースで実施しているため、このワークショップ目当てで来た人だけでなく、図書館にたまたま来て気になって参加してくれた親子もいたのではないと思う。地域の人たちが持つ温かい力が重なり合い、子供たちがその中ですくすくと育っていくこと、人は支えられて生きていることが感じられて、胸が打たれた。最後、小林さんが牛乳パックと輪ゴムで作るぴょんと跳ねるウサギの作り方を紹介して、皆でウサギを作り盛

況のうちにワークショップは終わった。午後からの団先生の漫画トークも、図書館1階のオープンスペースを区切って行われた。「Door」と「3 on 3」という作品が紹介され、実は2つは同じ家族の物語であることが明かされる。「3 on 3」は不登校の息子に悩む両親に対して、何か状況を変えてみることを提案し、父親が息子を毎週ドライブに連れ出すというお話。2人でドライブするうちに、息子が街のバスケットコートで知らないお兄さんとバスケットをするようになる。その後、学校を転校しバスケット部に入り、元々通っていて不登校になった学校とバスケットの試合をして負けるが大丈夫だった。問題が起きた時に、それを解決するには、自分が変わるか、他人を変えるか、状況を変えるかで、最も変えやすい状況を変えてみることで変化が生まれること、うまくいかない時ほど他の人のアドバイスが入ってこなくなるが、団先生の提案を受け入れて状況を変えるために出来る行動を起こした父親のすごさが語られた。漫画トークでたまたま隣に座った女性と、漫画の家族をどう思うか意見をシェアする時間があり、そこでぼろっと自分の家族の抱える問題について話したところ、別れ際に「お互い難しいこともあるけど、頑張りましょうね」と言って下さった。妹さんに誘われて初めて団先生の漫画を見たが、展示されていた漫画もとても良かったと仰っていた。知らない人と家族について話して、共鳴し、励まされる空間と時間が作り上げられていた。

翌日は震災遺構の荒浜小学校の見学。荒浜小学校は海岸から700mに位置しており、2階まで津波が押し寄せた。学校の周りを取り囲むように建っていた家は全て流されて、現在は津波の衝撃に耐えた松がところどころ残り、7.2mの高さの防潮堤が海岸沿いに延びている。沿岸付近は仙台市により災害危険区域に指定されたため、住民は集団移転をして、空き地が広がっている。住宅跡地の空き地に仙台市が農園や施設などを誘致している。津波の圧力でぐにゃっと曲げられた小学校2階の金属フェンス、身長をはるかに超える高さの津波到達線、押し寄せる津波の水流の中建ち続ける震災当日の小学校のビデオを見ながら、津波の怖さを体で感じた。震災前の荒浜小学校では地区対抗で運動会を実施しており、毎年地域の大人たちも地区カラーの法被を着て行進や競技に参加していたことや、過去に学校で実施していた夏祭りの様子がビデオで紹介された。ビデオの中で人々が笑顔で楽しんでいる様子と、現在の家が無い閑散とした地区の様子が対照的であった。元住人が荒浜学校を訪れても、亡くなっている人が映っているからとこのビデオを見ずに帰る人もあるそうで、胸が痛んだ。

その後、せんだいメディアテークに移動して、みやぎ民話の会の皆様から、どのような思いでこれまで民話を語り継いできたか、震災後の活動についてお話を伺った。民話はその人が生き抜いてきた激しい現実を支えられていること、語り手に見合う自分となれるように自分を壊しながら、命がけで聞き続けてきたこと、震災の証言集をまとめるエネルギーには生き残った者の使命としてこの災害を語りつがなければならないという強い覚悟と自責の念や後悔もあったことが語られた。心の中にある物語が、その人を支える。心の中にある物語を語ることによって聞く人との間で物語が共有される。聞いた人は、何か大切なものを手渡されたと感じて、それを次の人に繋ごうとする。真剣な心と心の出会いと対話が繋がって、

民話や物語が手渡されてきたこと、そして私自身もその系譜に連なり、みやぎ民話の会から何か大切なものを手渡されたことを感じた。

今回のプロジェクトに参加して印象に残ったのは「10年の重み」「心の中に話がある」という言葉だった。多賀城市は津波と地震により甚大な被害を受けたものの、街は綺麗に整備され、東日本大震災ははるか過去の出来事のように見える。だが、震災遺構や集団移転後の住宅跡地、海外線に沿って延びる防潮堤の景色に、そしてプロジェクトで出会った方々の話に一瞬顔を覗かせては消えるような形で、傷の痕跡や痛みの記憶の断片が隠れていた。傷跡はひっそりと目につかないように、薄い透明な布をかぶせて、人の心の中に、地域の片隅に横たわっているようだった。その傷跡の近くまで行くこと、その傷跡と共に生きる人たちと一緒にいること、それを10年間続けたこと。10年間をかけて紡いできた集団の物語と記憶を知り、多賀城と立命館の間で続けてきた心のやり取りに自分も参加することを通して、10年間の物語を受け止め、心の中で大切に抱えること。東日本家族応援プロジェクトを通して、震災と復興と共に生きる人々の物語の一端を自分の心の中に持つことが出来たように感じる。10年の物語の最後の年に参加して、大切な思いを受け取った者として、これから先どんな風にこの物語を発展させて継承するかを自分は問われているのだと思う。

最後に、現地で支えて頂いたたくさんの方々のご厚意に、心からの感謝を記して終わりたい。本当にありがとうございました。



東日本・家族応援プロジェクト in 多賀城

対人援助学領域 M2 若洲花菜翠

10月1日(金)から3日(日)で多賀城でのプロジェクトを行った。1日目は夕方から支援者交流会を行った。3、4ヶ月前から多賀城民話の会の会長になられた小林さんはとてもパワフルで、頂いた折り紙や短歌がとても温かかった。特に短歌は、31文字という短い言葉から情景や思いがスッと想像でき、言葉の持つ力を改めて感じた。また、丸山さんとは映画「護られなかった者たちへ」のお話をした。この日が公開日であったため、今後は映画を見た人の感想も調べながら、今の宮城県や東日本大震災についての理解を深めていきたいと思った。

2日(土)はまず、多賀城市立図書館で「うたとおはなしと伝承遊びをたのしもう」「紙芝居とペープサート」「団士郎の漫画トーク」を行った。「うたとおはなしと伝承遊びをたのしもう」は、多賀城民話の会のみなさまが担当してくださった。去年はオンラインで各自で聞き入っていたが、今年は会場の一体感のようなものを感じた。最初は泣いていたが、スッと民話に引き込まれる子ども。思わず足を止める通りすがりの人。「○○だって」と子どもに囁くお母さん。人を惹き付ける民話の力やリズムを目の前で聞くことで改めて実感することが出来た。「紙芝居とペープサート」は、どの企画も子どもたちがとても楽しそうで、保育士の方々の話し方、関わり方の一つ一つがとても勉強になった。特にはらぺこあおむしの紙芝居は、忘れられない読み聞かせとなった。事前学習のときから感じていた黒川先生や保育士の方々の温かさを直接感じられたのがとても嬉しかった。

そして、夕方からは、上山先生、モリス先生のお宅にお邪魔し、被災当時の多賀城の様子のお話と防災のお話を伺った。被災当時のお話は今の綺麗な多賀城駅周辺からはとても想像出来ないお話で、到着時とは多賀城駅周辺に対する見え方が変わった。建物の綺麗さの裏には、胸が痛くなるような景色があると思うと複雑な気持ちになった。また、防災に関するお話では、すぐ取り出せる場所においてある防災グッズや震災に備えたお部屋を見せて頂いた。誰かのお宅にお邪魔することはあっても震災への備えを見せていただくことはないので、とても貴重な機会だと思った。日頃の備えの積み重ねが自分や周りの人を守ることに繋がるのだと改めて学んだ。

3日目の午前、震災遺構 仙台市立荒浜小学校を訪れた。ホームページをみるだけでも胸が痛んだが、一言では表せないずーんと胸に来るものがあった。あちこちに残る津波の傷、被災当時の写真、避難して来た人の名前が書かれた黒板。「ここまで津波が来たんだ…」「ここにたくさんの方が避難していたんだ…」と現実感が増すようでどこか別の世界のような不思議な感覚になった。避難場所の検討を重ねてしてきたことが、避難した約320人の命を守りぬいたことに繋がったと思うと、疑うことの大切さを感じた。今までのやり方を素直に受け入れることも大切だと思うが、一度疑ってみることも同じくらい大切なのだと思っ

た。

午後はメディアテークで、みやぎ民話の会のみなさまにお話を伺った。その場でも述べさせていただいたが、瀬尾さんや小森さんのような若い人が民話に興味を持っていることに驚いた。自分とおそらく年齢の変わらない人達が、震災をきっかけに宮城県に移住し、民話に関わる活動をしている。このことがなんだかとっても不思議な感覚だった。私も民話を通して「あ、こう思ってたの自分だけじゃなかったんだ」と思える体験をしたいと思った。

今回このプロジェクトへの参加を通して、「同じ熱量で継続すること」の大切さを実感した。なぜなら、このプロジェクトを継続されている村本先生、平田さん、団先生、サポートし続けてくださっている丸山さん、黒川先生、民話の会のみなさまの言葉はどれも重みがあり、とても惹きつけられるものがあったからだ。このプロジェクトがたくさんの現地の方に受け入れられ、今後も繋がりたいと思ってくださるのも、このプロジェクトが同じ熱量で継続されてきたからではないかと感じた。

私は、10年間同じ熱量で継続したことがまだない。同じ熱量で継続し続けてたとき、どのような景色が見えるのだろうか。このプロジェクトのように、人と人との繋がりの輪が広がったり、自分事として考えられることが増えたりするのだろうか。確かに、2年間参加し現地を訪れたからこそ実感が伴った部分はある。だが、このプロジェクトに関わり続けている方には見えているものが自分にはまだ見えていないなあと感じることも多かった。きっと継続し続ける中で少しずつ1つ1つのものが繋がっていくと、段々と見えるものが増えていくのだと思う。来年から対人支援職として社会人になるので、同じ熱量で支援し続けられる人になりたいと思った。

